

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：34309

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18H03094

研究課題名(和文) 医療的ケア児の親が「子どもとわかり合う感覚」を実感する過程の解明とその共有の効果

研究課題名(英文) The process of realizing parental sense of understanding with their child who require medical care: A basic research on the effect of the sharing of parental sense

研究代表者

奈良間 美保 (NARAMA, Miho)

京都橘大学・看護学部・教授

研究者番号：40207923

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,800,000円

研究成果の概要(和文)：近年、新生児集中治療室退院後も医療的ケアを必要とする子どもが増えている。本研究では、このような状況における親の「子どもとわかり合う感覚」を相互主体性の概念から明らかにし、早期から親の感覚を共有することで子どもと家族主体の在宅ケアを推進する看護に関する教育プログラムを開発すること、参加した看護師の認識の変化からその有用性を明らかにすることを目的とした。研修会に参加した看護師は親による養育を子どもと家族主体のケアと関連づけてとらえていた。また、研修後の看護師は看護についての認識と実践がよりポジティブに変化することを確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では医療的ケアを必要とする子どもの親が体調管理を含めて「子どもとわかり合う感覚」を実感して行く過程を相互主体性の視点から探求する取り組みであり、従来の看護学に新たな知見を提示するという点で学術的意義がある。さらにNICU入院中から親の感覚を共有しながら親と子どもを支える看護に着目した教育プログラムの開発は、他の健康問題をもつ子どもや子育て全般の支援にも広く活用し得る方策として社会的意義があると考えられる。

研究成果の概要(英文)：In recent years, an increasing number of children have continued to require medical care after discharge from neonatal intensive care units. This study focused on the parental sense of understanding with the child based on the concept of intersubjectivity. Furthermore, this study aimed to develop an educational program to promote child- and family-centered home care by having nurses share the parental sense from the early postnatal period. This was in addition to clarifying changes in the perceptions of nurses who participated in this training program. A pre- and post-training survey of 22 participants in the training program revealed that nurses viewed parenting in relation to child- and family-centered care and that their nursing perceptions and practices tended to change more positively after the training.

研究分野：看護学

キーワード：親子の相互作用 医療的ケア NICU 相互主体性 教育プログラム

## 1. 研究開始当初の背景

近年、新生児集中治療室(NIUC)に入院する子どもの健康問題の重症化が進んでいる。急性期医療を担う病院での入院期間の短縮化が図られる中で、家庭での医療的ケアを担う親は子どもの体調の変化に伴う不安(橘、鈴木、2017)や人工呼吸器装着児を24時間ケアすることへの負担感を抱いていること(新村、森垣、浅井他、2015)が報告されている。出生時から健康問題を抱える子どもと家族の看護については、病状や治療に関する理解や医療的ケアの技術に焦点を当てた退院支援、さらには家族参加型のケアの効果に関する研究等(Cheng, Franck, & Ye, et al, 2021)が行われている。研究代表者らが医療的ケアを継続する子どもの養育者に対して行った研究では、養育のとらえ方として、親子が自然にわかり合う感覚に加えて表情や体調から子どもの落ち着いた状態を感じとる因子「子どもとわかり合う感覚」(奈良間、大須賀、松岡他、2021)が抽出された。そこで在宅ケアを継続する子どもと親を、ひとりの子ども、親として自然に生まれる感覚に注目することで、在宅ケアを継続する子どもと親が主体として生き、育つことを支える看護のあり方を見出すことにつながると考えて本研究に取り組んだ。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、新生児期から医療的ケアを継続的に必要とする子どもの親が、成長過程において「子どもとわかり合う感覚」を実感していく過程に注目して親の感覚を共有する看護を検討すること、親の感覚を共有することを通して子どもと親が主体となる在宅ケアを推進する教育プログラムを考案し、看護師の認識の特徴と変化から教育プログラムの有用性を明らかにすることである。

## 3. 研究の方法

### (1) 「子どもとわかり合う感覚」とその共有:

研究代表者らによる先行研究では、医療的ケアを継続する子どもの養育者がとらえる養育として、親子が自然にわかり合う感覚に加えて表情や体調から子どもの落ち着いた状態を感じとる因子「子どもとわかり合う感覚」(奈良間、大須賀、松岡他、2021)が抽出された。さらに、子どもが日常会話を理解しているかよくわからないとする養育者の中で患者会に参加している場合は「子どもとわかり合う感覚」をより感じやすいことが見いだされ(大須賀、奈良間、松岡他、2020)、重い障がいを抱える子どもの反応やその意味を患者会等で他者と共有することの重要性が示された。鯨岡(2006)は養育者が育児における相互主体性について、「互いに主体である者同士が関わり合うとき、そこに繋がりが生まれるときもあれば、繋がりが得ないときもある。それでもお互いが相手を主体として受け止め合えれば、そこにともに生きる条件が整う。それが相互主体的な関係なのだ」と述べている。在宅ケアを継続する子どもの親が「子どもとわかり合う感覚」を実感する過程は、子どもを単に理解するだけでなく子どもの主観を感じとることであり発達の基盤となる。先行研究でその構成要素が具体化されたことは、親の感覚を共有する看護の手がかりとなると考えた。さらに鯨岡(1988)によれば、第三者が親子と一つの場を共有するとき、子どもや母親の主観的なものが把握されるという事態にも間主観性が用いられると述べている。わかることを中心とした間主観性から、わからない場合であってもお互いが相手を主体として受けとめ合うことへと発展した相互主体性の概念は、親の感覚を看護師が共有することを説明し得ると考えた。

## (2)教育プログラムの検討と研修会の実施・評価：

従来の教育プログラムと修了生への調査として、研修代表者らは親子の相互作用、及び patient- & family-centered care の概念を基盤に包括的支援の実践能力の向上を目指す小児在宅ケアコーディネーター研修会として看護師対象の教育プログラムの評価・改訂に継続的に取り組んできた（奈良間美保、堀妙子、田中千代他、2006）。本研究ではまず、2005 年度から 2019 年度の本研修会を修了した看護師の認識と活動状況を明らかにするために、2020 年 2 月～3 月に web 調査を実施した。Web 調査の内容は、松岡ら（2016）が作成した＜子どもと家族を主体としたケア＞26 項目 4 因子について「大切さ」は 4 段階の択一式回答（4：とても大切である～1：全く大切ではない）、「実施」は 4 段階の回答（4：いつも実施している～1：全く実施していない）を、上原ら（2016）が作成した＜家族の養育＞33 項目 4 因子について「大切さ」は 4 段階の択一式回答（4：とても大切である～1：全く大切ではない）、「実施」は 4 段階の回答（4：とても意識して関わっている～1：全く意識して関わっていない）を求めた。対象の背景として看護師の経験年数と小児看護の経験年数、研修修了後の経過年数等の情報を得た。46 名の回答を分析した結果、＜子どもと家族を主体としたケア＞と＜家族の養育＞の多くの項目で「大切さ」の方が「実施」に比較してより肯定的に回答された。その一方で、＜家族の養育＞に含まれる親の体調や医療的ケアの方法に直接関係する項目については、「実施」が「大切さ」より肯定的に回答されていた。また、研修会について、看護実践や多職種連携に役立ったとの回答の他に、子どもや家族にとっての看護を考えるようになったなどの子どもと家族主体のケアに焦点を当てた回答が得られるなどの研修会による一定の成果を確認した（堀、奈良間、松岡他、2022）。

新たな教育プログラムの考案と研修生への調査として、従来の教育プログラムを基盤としながらも新生児期から医療的ケアを継続的に必要とする子どもの親が成長過程において「子どもとわかり合う感覚」を実感すること、親の感覚を共有することを通して子どもと親が主体となる在宅ケアを推進する看護師を育成するための教育プログラムを新たに検討し、看護師の認識の特徴と変化から教育プログラムの有用性を検討した。2021 年 8～12 月に 3 回、延べ 4 日間のオンライン開催とした。研修会の参加者の募集は医療機関等への研修会の案内の郵送とウェブサイトへの掲載で行った。参加者に対する web 調査は研修会前後に実施した。調査内容は修了生への調査と同様に＜子どもと家族を主体としたケア＞26 項目 4 因子の「大切さ」と「実施」、＜家族の養育＞33 項目 4 因子の「大切さ」と「実施」についてそれぞれ 4 段階の択一式回答と、基礎情報として看護師の経験年数と小児看護の経験年数、研修会参加動機、研修会の感想等から構成した。さらに、研修会終了後に修了生に対して小児在宅ケア支援の体験、研修会参加の気づきと周囲との共有に関してインタビューを実施した。

## (3)倫理的配慮：

研究への参加は自由意思によること、不参加や同意の撤回による不利益を被らないこと、web 調査は個人が特定されない方法で行い、全過程において個人情報の漏洩を防止すること、調査中に負担感を感じた場合の対応等について書面と口頭で説明した上で参加の同意を確認した。インタビューに参加する場合は研究者と参加者で同意書への署名を取り交わした。研究代表者の所属施設の研究倫理委員会の承認を得て研究を実施した（承認番号：19-54、21-11）。

## 4．研究成果

研修会には 22 名の看護師が参加した。web 調査には研修会前に 22 名が回答し、そのうち研修会後は 9 名の回答が得られた。インタビューは 3 名の協力を得た。研修会前の web 調査に回

答した 22 名の看護師の性別は全員女性、年齢は 20 歳代 10 名(45.5%)、30 歳代 3 名(13.6%)、40 歳代 6 名(27.3%)、50 歳代以上 3 は名(13.6%)、看護実務経験年数の幅は 2~33 年であった。研修会参加動機(複数回答)は、「小児在宅ケアに関心があったから」が 20 名と最も多かった。

研修会前の回答では、<子どもと家族を主体としたケア>、<家族の養育>ともに肯定的な回答が多く、多くの因子では「大切さ」が「実施」より肯定的に回答する傾向があった。研修会前後の 2 回の web 調査結果では、<子どもと家族を主体としたケア>と<家族の養育>が関連性をもちながら意識の高まりや実践への取り組みが促進された。入院中から一貫して親の視点に着目し、医療的ケアを継続する子どもへの思いや、子どもをわかる或いはわからないという親の感覚を感じ取り、脅かしのない関係性の中で感覚を共有できることを目指した教育プログラムの意義が見いだされた。今後は、少数ながら<子どもと家族主体のケア>と<家族の養育>に注目した看護の「大切さ」を実感しにくい看護師の存在に関心を寄せ続けて、心理的に安全な環境の中で自らの主観を他者と共有する機会を提供する必要性が示唆された。

#### <引用文献>

堀妙子、奈良間美保、松岡真里他、小児在宅ケアコーディネーター研修会を修了した看護師の活動状況と子ども家族主体のケアに関する認識、京都橘大学研究紀要、48 号、2022、229 - 248.

鯨岡峻、ひとがひとをわかるということ 間主観性と相互主体性、ミネルヴァ書房、2006.  
鯨岡峻、母子関係と間主観性の問題、心理学評論、29 巻、4 号、1988、506 - 529.

松岡真里、上原章江、茂本咲子他、『子どもと家族を主体としたケア』に関する看護師の認識の特徴 - 医療的ケアを必要とする子どもの在宅ケアを検討してから家庭で生活する時期に焦点を当てて -、日本小児看護学会誌、25 巻、3 号、2016、24 - 31.

奈良間美保、大須賀美智、松岡真里保他、医療的ケアが必要な子どもの養育に対する家族の認識の特徴と因子構造 - 入院中から家庭で生活する時期に焦点を当てて -、京都橘大学研究紀要、47 号、2021、251 - 264.

奈良間美保、堀妙子、田中千代他、小児在宅ケアにおけるコーディネーター教育プログラムの検討、日本小児看護学会誌、15 巻、2 号、2006、53 - 60.

Cheng, C., Franck, L.S., & Ye, Y., et al. 2021, Evaluating the effect of Family Integrated Care on maternal stress and anxiety in neonatal intensive care unit, Journal of Reproductive and Infant Psychology, Vol.39, 2021, 166-179.

大須賀美智、奈良間美保、松岡真里他、愛知医科大学看護学部紀要、19 号、2020、95 - 108.

橘ゆり、鈴木ひろ子、医療的ケアを必要とする子どもの在宅生活を継続している母親の思い、日本小児看護学会誌、26 巻、2017、45 - 50.

新村恵子、森垣文、浅井嘉子、杉浦早苗、急性期小児病棟における人工呼吸器装着時の在宅移行体制の評価 - 養育者へのインタビューから -、日本小児看護学会誌、24 巻、1 号、2015、32 - 38.

上原章江、奈良間美保、大須賀美智他、医療的ケアを必要としながら生活する子どもの家族の養育に対する看護師の認識 - 在宅ケアを検討してから家庭で生活する時期に関わった病院看護師と訪問看護師の調査より -、日本小児看護学会誌、25 巻 1 号、2016、59 - 66.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 茂本 咲子、奈良間 美保、松岡 真里、大須賀 美智、上原 章江、花井 文、橋本ゆかり	4. 巻 21
2. 論文標題 医療的ケアを必要とする子どもの家族が認識する『子どもと家族を主体としたケア』の特徴-自自宅ケアを検討してから家庭で生活する時期に焦点を当てて-	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岐阜県立看護大学紀要	6. 最初と最後の頁 49-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 上原 章江、奈良間 美保	4. 巻 30
2. 論文標題 健康障がいをもつ子どもの親が自分の感覚を表出することへの看護師の認識	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本小児看護学会誌	6. 最初と最後の頁 26-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20625/jschn.30_26	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 奈良間 美保、大須賀 美智、松岡 真里、上原 章江、茂本 咲子、花井 文、橋本ゆかり	4. 巻 47
2. 論文標題 医療的ケアが必要な子どもの養育に対する家族の認識の特徴と因子構造 入院中から家庭で生活する時期に焦点を当てて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都橋大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 251-264
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 大須賀 美智、奈良間 美保、松岡 真里、茂本 咲子、上原 章江、花井 文、橋本ゆかり	4. 巻 19
2. 論文標題 医療的ケアが必要な子どもの養育に対する家族の認識の関連要因の検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 愛知医科大学看護学部紀要 (1347-9873)19号 Page95-108	6. 最初と最後の頁 95-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀妙子、奈良間美保、松岡真里、茂本咲子、花井文、上原章江、大須賀美智	4. 巻 48
2. 論文標題 小児在宅ケアコーディネーター研修会を修了した看護師の活動状況と子ども家族主体のケアに関する認識	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 京都橘大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 229-248
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 奈良間美飛	4. 巻 85
2. 論文標題 【今考える, 移行期医療】疾患モデルから考えよう これからの移行期医療 在宅医療ケア児 移行支援 総論	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 小児科診療	6. 最初と最後の頁 242-246
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 奈良間美保
2. 発表標題 看護研究における質的研究の意義とその取り組み
3. 学会等名 第24回一般社団法人日本看護研究学会東海地方会学術集会 (抄録開催) (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 奈良間美保
2. 発表標題 子どもと家族が主体であること
3. 学会等名 日本小児診療多職種研究会 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 奈良間美保
2. 発表標題 患者・家族主体の看護
3. 学会等名 第10回成人移行期支援フォローアップ講座思春期看護研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 堀妙子、奈良間美保、松岡真里、茂本咲子、花井文、上原章江、大須賀美智
2. 発表標題 小児在宅ケアコーディネーター研修会を修了した看護師の活動状況と子どもと家族主体のケアに関する認識
3. 学会等名 堀妙子、奈良間美保、松岡真里、茂本咲子、花井文、上原章江、大須賀美智
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	松岡 真里  (MATSUOKA Mari)  (30282461)	三重大学・医学系研究科・教授   (14101)	
研究分担者	堀 妙子  (HORI Teko)  (40303557)	京都橘大学・看護学部・教授   (34309)	
研究分担者	茂本 咲子  (SHIGEMOTO Saki ko)  (60336641)	岐阜県立看護大学・看護学部・准教授（移行）   (23702)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山本 弘江  (YAMAMOTO Hiroe)  (80251073)	愛知医科大学・看護学部・准教授    (33920)	
研究分担者	高橋 由紀  (TAKAHASHI Yuki)  (80346478)	名古屋大学・医学系研究科（保健）・准教授    (13901)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関